

ええい、もう、じれったいな。

そんなふうに御託を並べなくたって、自分がどういう理由で出廷を命じられたのかはわかってるつもりだ。同時に「メタルエンパイア」帝国でこのような法廷が設けられるのがどれだけ異例かもね。

ぼくが漂流してきた人間だから、高度に機械化された帝国の兵士や臣民と違って、破壊してデータを回収すれば必要な情報を抜き出せるというわけじゃないから、だからこうしてリアルワールドの形式を真似てくれたんだろう？ 実際有難いと思ってるよ。きみたちにそのつもりはないんだろうけど、こちらの世界にやってきて5年、漂流前の知識と技術のすべてを帝国のために使ってきたぼくへの配慮すら感じた。

でもだからと言って、ぼくがきみたちの聞きたいことをすらすら喋れるわけじゃない。ぼくは「ノーチラス」の現在の居場所をまったく知らないし、帝国が目下搜索しているナノモン个体についても同様だ。彼らがどのようなにして帝国と「ディープセイバーズ」の搜索網を逃れているかも。毎日17時からの「放送」をどのような方法で行っているかも。帝国のお偉方の興味のあることは、ぼくは何も知らない。

それでも最初から？ わかったよ。ぼくとしても処罰を先延ばしにできるのはありがたい。

……オーケー、それなら順を追って話をしよう。でもその前に2点。ぼくの話についてのきみたちの理解を確実なものにするために前置きしておかなければならないことがある。

まず1点目。この物語を語る中で、ぼくは機械であるきみたちの持ち合わせていない、極めて人間的、動物的な感情に言及することになる。具体的にいうならば「恋」だ。

わざわざ調べるまでもないよ。「特定のものにつよくひかれ、切ないまでに深く思いを寄せる」感情のことだ。外部記憶にも頼らずぼくがこうして意味を教えてあげられるのは、以前、彼にも同じように定義を尋ねられたからさ。

そして2点目。この世界に来てからこっち、ぼくは個体をあえて名前で識別せずに種族名で呼び続けるこの世界のやり方にまるで馴染めなかった。ぼくが無二の友人として接していたナノモンは彼ただ1人だし、ぼくが語るべき言葉を持つ唯一のナノモンも彼だ。

彼はぼくが自分を手製の愛称で呼ぶのを許してくれたし。ぼくはそれにすっかり甘え切ってしまった。この陳述の中でも彼を呼ぶときはその愛称で通そうと思う。理解してくれるとありがたいね。

ぼくは彼を「ネモ」と呼んだ。

これは、彼への弁護だ。

●
ぼくが帝国の「デーパーセイバース氷床基地」に派遣されたのは2年前、「メタルエンパイア」帝国がああ基地を作って少ししたことだった。

当時帝国とは親密な関係にあったデーパーセイバースの、わざわざ不毛な寒冷地域に基地を建設した理由については、いくつかぼつとしない研究目標が示されたばかりでほんとうのところは伏せられていたはずだけれど、最初の探査船に乗って基地に赴くことになったチームの中に、それを知らないものはぼくを含め誰もいなかった。

当時こそデーパーセイバースは帝国の技術供与に最大限の好意を返してくれていた。でもそれはあくまで彼らがホスト・コンピュータの都合を押し付けてくる「ウィルスバスターズ」に対しての一種の抑止力を、帝国の技術を利用したサイボーグ化に見出していたからだ。

彼らがある程度の生産・改造を自領土内で行うことのできるシステムを完成させ、ウィルスバスターズも迂闊に手出できない規模にまで勢力を広げた時点で、帝国への協力を見直そうとする動きはデーパーセイバース内で確実に広がっていた。

技術供与の見返りとして帝国が彼らに求めた研究協力はかなり広範囲にわたるものだったし、その条約が、それがどんなに廃オイル製の帝国流オブラートに包まれていたとしても、実験のための検体として海のデジモンたちを差し出すよう求めていたことは事実だった。

要するに彼らは知恵と力をつけて、足元を見られるのに飽きたんだね。条約締結時のデーパーセイバース側の実質的な盟主で、自身にも機械化を施すほどの親帝国派だった将軍・メタルシードラモンへの支持も揺らいでいるという話だった。

そんなメタルシードラモンの代わりに力をつけていたのが氷床地域の領主にして筋金入りの反帝国主義者・ヴァイクモンだった。メタルシードラモンとの政争に敗れ、僻地の領主にとどまっているけれど、影響力は頭一つ抜けている。既に広く機械化を受け入れたデーパーセイバースが、彼の一声でまた石器時代に逆戻りするとは思えなかったけど、少なくとも、彼の発言の重みが増すことが帝国にとって大きな損失になることは間違いないかった。

そしてぼくたちが送られた氷床基地はそんなヴァイクモンの納める地域のど真ん中。つまり帝国の真の目的はデーパーセイバース内の反帝国派との争いに備えたけん制だった。あれから1年、ぼくたちは、帝国の予想が当たっていたことをもう知っている。

……話がそれたね。

そんな事情もあって、できたての氷床基地にやってきた第1次調査隊の士気は著しく低かった。もちろんデジモンたちは違うよ、ぼくたち人間の話。もともとわけも分からずこの世界にやってきて、たまたま落ちてきた場所を統治していたきみたち「帝国」に拾われて拒否権も何もなく使われている身だ。極寒の不毛の地に放り出されて、しかもそこがいつ敵地のご真ん中になってもおかしくない場所となれば、くさってしまうのも無理はない。人間たちは毎晩のように漂流者同士で集まっては、帝国が人間用に用意してくれた唯一の嗜好品である泥水のようなコーヒーを片手に、現状への悲観的な意見を交換し合っていた。

ぼくもそんな荒れている1人だったわけだけど、他の連中とは荒れている理由が少し違っていた。

当時のぼくの仕事は、厚い氷床に覆われたこの地域で地面がむき出しになった露岩域を探すこと。さらにその中で気温、湿度が異星に近い環境を見つけることだった。長く帝国の悩みの種だった「エリア5」からの侵入者への対策として発案された計画で、彼らの住環境に近い環境での実験が今後の作戦立案や効果的な兵器開発を後押しする見込みになっていた。

その計画の調査員として基地に向いたぼくだったが、しかし「帝国」のサポートはあまりにおざなりだった。調査に護衛のデジタルモンスターがつくのはぼくとしても賛成だったけれど、それがフロゾモンではせっかくの調査地をひどく傷つけてしまうことにもなりかねない。せめて2足歩行をするモンスターをと頼めば、ガードロモンやアンドロモンでは旧式のパーツが極限の環境に耐えられないと返ってくる。もっと新型の連中もいるだろうと言えば、彼らの数には限りがあり、どれも既にほかの任務に就いている、ときた。

「それなら自分で隊員たちに直接頼むといい。皆他に仕事があるだろうが、1年先の本国からの追加派遣を待つよりもマシだろう。調査に行くに十分だと考える人員が揃うまで、君のことは適当な技術者のアシスタント業務に回す」

頑として首を縦に振らないぼくに、調査隊長のハイアンドロモンはため息をつき、そう告げた。

そんなわけで、ぼくはそれから1か月もの期間を、酷いおいの廃オイルの処理作業と、どこから湧いてくるのかもわからないヌメモンの駆除作業に費やし、そして1日の最後にはさつきまで見ていた廃オイルとまるで区別のつかないコーヒーをすすりながら、仕事への愚痴を他の漂流者に吐く羽目になっていたのだ。

結局のところ、ネモにとってはぼくは不気味な黒い液体でくだをまく異種族の1人でしかなかった。彼がぼくを選んだのは、ただ単にぼくが人より退屈してみえたからだろう。



「ついてこい、何やら君の仕事に興味のある教授がいるらしい」

そんな声がかけられたのは、直談判もむなしく調査に同行してくれるものは現れず、追加の調査員を乗せた船が来る1年後までこのような生活が続くのかと諦めていた矢先のことだった。

上官がぼくを連れて行ったのは基地の一角にある小さなラボだった。上官を置いて自動扉を1人でくぐる。その音に呼応するように、足の踏み場もない散らかった部屋の真ん中で、無人に思えた椅子がくるりと回った。椅子の背もたれよりも小さなカプセル状の体についた目がぼくを見つめた。

「教授」がナノモンだということに気付き、ぼくは少し憂鬱な気分になった。デジタルモンスターを種族で区別しないということを信条にしているぼくだけれど、ナノモンという種族はあまり好きになれなかった。その脳がほとんどを占める小さな体と、こちらを見下し値踏みするように見据えるぎよろりとした神経質な目は、昔大学の研究室にいた嫌味な准教授を思い出させるのだ。

けれど、ぼくの前にいる彼の目は神経質というよりはどんよりと曇っていて、それはぼくに親しみを抱かせた。小型のダウンに似たもこもこの保温素材でその小さなカプセル状の体をくるんで、それをベルトで縛っている姿はさながらコンパクトにまとめられた人間の寝袋のようで、どこか滑稽ですらあった。

「そこに落ちているチップを取ってくれないかね」

それがナノモンの第一声だった。ぼくは面食らいながらも頷きそれを拾い上げる。上官が彼を「教授」と呼んだことからして、彼はなにかしらの要職についているはずだ。うまく彼に取り入れれば、露岩域の調査に特別に人員を回してもらえるかもしれないという下心があったのだ。

金属パーツの散らばる危険極まりない床に注意深く歩を進めそのチップを手渡せば、彼は不器用にぺこりと頭を下げた。

「すまないね。最近あまり休息をとっていないものだから。それで、きみを呼んだ用件なんだが……」

いえ、とか、とんでもない、というようなことをもごもごと返すぼくの眼をその濁った眼でまっすぐに見て、彼は言った。

「きみ、音楽は好きかね？」

「はい？」

「音楽だ。好きかい。知識はあるかな」

ぼくはきつとひどく笑える顔をしていただろう。許してほしい。「帝国」の領土に落ちてきてからこっち、音楽なんて言葉は聞いたこともなかったのだ。機械の体と脳を持つデジタルモンスターは音楽など聞かないし、人間にも、元いた世界の二度と聞けない音楽の話

をしてわざわざ惨めな気分になる奴はいなかった。

「聞こえなかったか？ 音楽は好きかと聞いたんだ」

「……まあ、それなりには。理論や楽典はさっぱりですが」

「長距離を歩くことは好きか？」

「好きですが、体力は人並みだ」

「徒労は？」

「好きな人はいないでしょう。でも、この機械たちほどに憎んではない」

「ふむ、まあいいだろう」

そういつて彼はぼくに背を向け、先ほど手渡されたチップを机の上に置かれた機器に差し込んだ。その手のひら大の銀色の機器は、半分以上が細かな穴のあけられたスピーカーになっていくようだ。その横にはいくつかのスイッチがついている他に、大きなダイヤルがついていて、上部には銀色のアンテナらしきパーツがつけられている。

ナノモンがゆつくりとそのダイヤルを回す、スピーカーから耳障りなノイズが部屋に響く。彼がどれだけ細かくダイヤルを動かしても、その向こうから何か聞こえることはなく、やがて彼はその機器をぼくのいる方の床に放り出してしまった。

「む、やはりだめか」

多分に落胆を含んだ彼のその言葉を聞きながら、ぼくは足元に転がった銀色の機器を拾い上げる。先ほど遠目に見てうすうす勘付いてはいたが、これはやはり――。

「ラジオですか？」

「まあ、原理と見た目はそうだ」

つまらない質問をするなどでも言いたげに彼は濁った眼をこちらに向ける。

「きみが例の人間で間違いないね？ 同道者の性能を理由に外部での調査任務を拒否しているハイアンドロモンが言っていた」

「決してそういうわけでは……」

突然の言われようにぼくが抗議をしようと口を開くの彼は遮って、あっさりと言った。

「私が同道しよう」

ぼくはしばらく声が出なかった。

「え、その……あなたが？」

「ああ、そうだ」

「でも、仕事は多いはずだ」

「興味のある仕事は目下一つも無い。興味のない仕事については、すべて自動で進むようにプログラムを昨晚組んだ。成果に個性も独創性も期待はできないが、独創性を期待してナノモン種に仕事を振るやつもないからな」

その目を見れば、彼が冗談を言っただけをからかっているのではないことは明らかだった。それでも疑問は残る。

「ぼくの仕事があなたの興味を引いたのですか？ なぜ？ 露岩域をひたすら歩きまわって、そこにある砂粒から手元の見本表とデータ組成の同じものを探す。研究は研究ですけど、どちらかといえば作業に近い。実験場所が見つかってから首を突っ込むならまだしも……」

「それだ」

「え？」

「この地域をかなり広く調査するのだろうか？ 移動にフロゾモンを利用するのも途中まで、ある地点からは何十キロという距離を全て徒歩で移動する。言ってしまうえばかなり自由以外を歩き回るわけだ。極限の環境と、ディープセイバーズ内の過激派からの攻撃の恐れから、多くの人員が基地を中心とした半径100メートルから出ることも許されていない。そんな中でだよ」

そんな言い方をされれば、ぼくだってピンとくる。

「外に出てやりたいことがあるような言い方ですね」

「そうだ」

彼は頷く。

「君には調査時間の一部を私に割いて欲しい。それが同道の条件だ」

明確な条件だった。ぼくの方は調査に出られず毎日をヌメモンの相手に費やしているのだから断る理由なんてない。それでも疑問は湧いた。

「あなたの地位があれば、研究や開発のための調査には許可が出るはずだ。他に仕事があるにしたって——」

「ないんだよ。きみ」

「……」

「仕事としての正当性はない。許可が出る見込みもない」

それで話は終わりだといわんばかりに彼は再び机に向かう。ぼくがそれ以上何かを尋ねたり意見をすることは許されないとでもいうような……。

いや、単純に何も聞かれたくない、ダウンでもこもこの小さな背中ではまるで駄々っ子のようにそう語っていた。



それから、ぼくたちはほとんど毎日のように連れ立って基地外の調査をするようになった。ディープセイバーズから提供された地図（お世辞にも、大した製図技術とは言えなかった）とにらめっこしながら調査地を決め。その付近までフロゾモンで移動する。

そこからは完全に徒歩だ。二人で荷物を背負い、荒涼とした氷の大地に赤茶けた地面を探す。適宜試料採取を挟みながら1日に大体10キロから15キロを移動する。

そうして一通りの調査が終わると、フロゾモンへの命令役はナノモンに代わる。彼が行くのは基地が比較的近くに見える地点だ。そこまでたどり着くと、彼はぼくと最初に会った時に持っていたあのラジオに似た機器のダイヤルに手を伸ばす。それを注意深く回し、一つ一つのノイズに耳を澄まし、やがてため息をついていうのだ。

「今日はもう十分だ。帰ろう」

そんなだったから、ぼくは彼からその行動の意味を聞くことに関しては半ば諦めていた。下手にそこに踏み込んでへそを曲げられてぼくの調査の方がおじゃんになってしまうのが怖いのもあった。しかしそれ以上に、無粋なことを尋ねて、彼との心地よい時間に水を差すのが嫌だったのだ。

彼は多くのナノモン種がそうであるように理知的で寡黙だったが、同時に見た目の印象よりもずっと暖かみのある性格をしているようだった。聞き上手で、ぼくの調査の話にも真剣に耳を傾け、専門が違うからとつましい前置きをしたうえで鋭く的確な意見を述べてくれた。

そして彼の方から尋ねるのは、多くが音楽のことだった。ぼくは彼にお気に入りのジャズギタリストの話をして、彼はいつも分かったような分からないような相槌を打つ。そんな時間が、ぼくには素晴らしいものに思えた。

その頃ぼくは既に彼をネモと呼ぶようになっていたし、彼もぼくに親しみを持って接してくれていた。

認めよう。果ての無いようにも見える氷の大地の上で、ぼくはこの小さなカプセル状のモンスターのことが、すっかり好きになっていったのだ。



そんなわけで、ネモが自分の目的について明確な言葉で語ってくれたのは、調査を始めてから3か月ほどが経ったある日のことだった。

いつも通り、ぼくの方の調査を終えてフロゾモンに乗り込み、例の地点に向かう。昼日中で太陽は高く昇っているのに、空気は良く研いだ刃物のようにきりりと冷えていて、一息を吸うごとに肺が凍り付くような感覚に襲われる。降り積もった真白い雪が太陽光を強烈に照り返すせいで、ぼくの顔は小麦色に焼けてしまっていた。

「さあ、今日はどうだろうか」

ネモがごによごによと呟きながら手元の機械を操作する。そんなすべてがもうすっかり習慣になっていて、ぼくもフロゾモンの鉄の体にくたくたに疲れた背中を預け、いつも通りの雑音に傾けるネモの方を見ようともしなかった。

〈ここはくらい いつもどおり ここはつめたい いつもどおり〉

だから、ノイズの中にいつもと違うそんな音が聞こえた時、ぼくは思わず飛び起きて、氷の大地に思いきり倒れ込んでしまった。

痛みに汚い言葉を吐きながら起き上がりネモの方を見れば、彼は必死で例のラジオにかじりついて、その音をほんの1節たりとものがすまいとしている。

「やっと捕まえた。この周波数だ」

〈わたしはきょうもひとり でもかなしくなんてないの〉

音楽が好きかというネモの問いに「それなり」と答えたぼくの言葉に偽りはない。聞くには聞くが、良し悪しは分からない。その程度の趣味だ。どこにいても耳に飛び込んでくるものの良し悪しをいちいち気にしてられないし、ましてそれに関する嗜好を自分を定義する要素として数えるなんて、酷く愚かしく思える。

でも、そんなぼくをして、その歌は、とても美しかった。

〈ここにはおはようはない ありがとうも さようならも〉

そうだ、たしかにそこから流れていたのは旋律で、誰かの紡ぐ歌だった。今まで聞いたどのメロディよりも静かで、それでいてつましきの欠片もない。まだ恋をしたことのない少女が歌う恋の歌のように、それは野放図な力強さでぼくたちの白い息から無理やり言葉という記号を奪ってしまった。

〈ああ こんなわたしも、いつかこいをするのかしら〉



「こりやすごいや」

3分だったろうか、或いは3時間だったろうか、断続的に続いたその歌が止んだ時になって、ぼくはへたへたと真白い大地に座り込んで、やっとのことでそんな言葉をひねり出した。そんなぼくの言葉で感想としては十分だともいうようにネモは頷く。

「この基地が建設されるよりも前に一度、立地の確認のためにここを通ったことがあってね。その際にフロゾモンに積まれた通信機器が旋律に似た音声を受信したんだよ。他のものは気に留めてもないようだったが、私は……」

そうして彼はその眼を海の方へと向けた。光の加減のせいだろうか、その眼はいつになく透き通って見えた。

●

それからネモのラジオのダイヤルはもうずれないようにテープでぎっちり留められ、そのアンテナは凍てつく氷床の上で1週間に1回程度のペースでその歌を受信するようになった。

そこから聞こえるのはいつも歌であり、言葉だった。そのラジオの向こうのシンガーはいつも滅茶苦茶で美しい節に乗せて、ひどく稚拙な言葉を歌うのだ。

例えば、

〈きょうはさかながきたの　とつてもながくて　きれい〉

だとか、

〈きょうはちよつとあたたかい　けど　あたたかいのは　べつにすぎじゃない〉

といった感じ。

「きみ、詩は好きかね？」

ある日、歌を聞き終えた彼がそう問いかけてきた。ぼくはフロゾモンに寄り掛かりながら、水筒から注いだぬるいコーヒーをすすり、エネルギーバーを齧っていた。雨に濡れた新聞紙とそれを絞った水を飲んでいるような味だった。

「嫌いだけど、あなたよりは詳しいよ、ネモ。だけどこれは詩じゃない。幼い言葉による事実の羅列って感じだ」

「ふむ……とすると、彼女の歌っているのは全て事実だと？　実際に暗く、魚がいるところにいるというわけだな。興味深い」

「『彼女』？」

ネモの言葉にぼくは眉を上げた。デジモンに性別はない。ぼくがこの世界に来て最初の頃に学んだことだ。

「『彼女』だって？」

「この未知の歌い手に対する印象から来る仮の呼称だ。不満かね？　きみだって私をネモと呼ぶ」

「不満はないよ。でも理知的なあなたがそうするのはなんというか、意外で」

「そうか？」

彼はぼくから目をそらし、海を見つめた。肌を刺すほどに澄んだ空気の層は、それがあまりに透明であるがゆえにかえって無視できない存在感でそこにあり、その向こうで水平

線は、それが不定形な二つの青の境界だとは思えないほどにまっすぐだった。

「ネモ、あなたは目的通り目当ての歌姫を見つけた。声だけね」

「歌姫？」

「あなたの表現に合わせたんだ。聞いてよ。これからどうするんだ？ 毎日この海岸線にきてノイズ交じりの歌に耳を澄ませるだけ？ それをずっと続けるの？」

ぼくの言葉にも彼は濁った眼でずっと水平線を見つめるだけだった。

「私は彼女の歌が気に入ったんだ。それ以上を望む必要があるかね」

「どんな子が歌ってるか知りたくはないの？ もっとそばで聞きたいとか、思わない？」

ネモはこちらを向かなかった。そこそこの期間彼と付き合ったぼくには、ネモがただ意地でそっぽを向いているのだと分かった。

「彼女のそばをきみも聞いていただろう。暗く、冷たく、魚がいる環境、ネットの海の深海域だ。ディープセイバーズの連中ですら把握しきれない地域に調査許可が下りるわけがないし、第一装備も……」

「そんな言い訳しないですっぱり『興味ない』って言っていれば、ぼくだってこんな話しない」

「興味がない」

「ナノモン種史上最悪の嘘だね」

「きみは何の話がしたいのだ」

「あなたのそれが『恋』だという話だ。プロフェッサー」

沈黙が流れた。

「恋」

ネモが呟く。

「彼女の歌にも出てきていたが、私はその言葉の定義を知らない」

「『特定のものにつよくひかれ、切ないまでに深く思いを寄せる』感情のことだよ」

「辞書でも引いたのか」

「そうだよ。どうせあなたが聞いてくると思って、夕べ調べておいたんだ。でも、辞書の内容なんてどうだっていい。問題は、あなたがその気持ちにそのままそっぽを向き続けるのか、ってことさ」

「私はマシーン型だ。感情とは無縁だよ」

「うそつけ」

フロゾモンが後ろでなにか声を上げた。もう夕暮れ時で、そろそろ返らないと行けない時間、ということらしい。

ぼくはネモの強情さが頭にきていたから、彼の小さなカプセル状の体を無理やり抱え上げると、フロゾモンの上に放り投げた。そのあと自分でも飛び乗れば、万事を心得たとも言いたげにフロゾモンがそのエンジンをふかす。

その轟音の中で、ネモがぼつりとつぶやいた。

「彼女は、私のことを知らない。なにも」

「ぼくのことも知らないさ。でも、ぼくはそのことで傷つきはしない。いまのあなたのようにね」

ぼくの答えに彼はももこの体ごとふいとそっぽを向き、再び水平線に目をむけた。

それから1週間ほどして。彼は深海に潜るための舟の開発を始めた。



「開発の調子はどう？」

ある日、すっかり日常となった氷の大地でのリサイタルの前に、ぼくはネモにそう尋ねた。

ディープセイバーズ領であるネットの海、それも深海へのダイブは重大な違反行為だ。帝国とディープセイバーズのどちらに見つかってもマズいどころか、両者の関係に決定的にヒビを入れることになりかねない。それに深海の環境では当然命の保証もない。

そんな危険行為を犯そうとしているにもかかわらず、彼はこれまでのいつよりも生き生きとしていた。

「順調だ。水圧に耐える機体の開発に関しては容易いし、海底に到達してからの探査設備も型落ちのジャンク品の中からなんとか調達できた。できることなら海のモンスターたちの目をかいくぐるステルス機能も欲しいところだな」

そういつて、彼はごくひかえめにぼくの方を見上げた。

「きみも来るか？」

「ぼくが行ってどうするんだ、ネモだけでいいよ」

「む、そうだな」

「でも、ありがとう」

まだ設計図も完成していないというのに、妙にそわそわして海を見つめる彼にぼくは苦笑し、その手元のラジオを指さした。

「そら、今日もはじまるよ」

ぼくもネモも、すっかり彼女が歌いだす時間を心得ていた。彼がラジオのスイッチを入れれば、スピーカーが幾分かノイズと共に、気まぐれで美しい旋律を響かせる。

〈ここはくらい いつもどおり ここはつめたい いつもどおり〉

その一続きの言葉に連なる旋律は、ここ数か月で彼女のお気に入りレパートリーにな

ったらしい。そこから音程も拍子も滅茶苦茶な節に乗せて、気まぐれにその日にあったことを歌うのだ。

〈きょうはゆきがふつたの これゆきっていうのよね〉

「雪？」

ネモが目を丸くしてぼくの方を見た。

「彼女がいるのは海底だろうか？ 雪が降るはずがない」

「そのはずだね」

「私の推測は間違っていただろうか。潜水艇では彼女に会いに行けないのか？」

「落ち着きなよ」

彼が目に見えて動揺するものだから、ぼくは呆れて思い付きを口にした。

「そうだな。元の世界で『マリンスノウ』っていうのを聞いたことがある。生物の遺体の破片や微生物の死骸とかの有機物が白い粒子になって、雪みたいにして海底に降るんだよ。それかも」

ぼくのとっさの言葉にナノモンは首を振る。

「いや、それは妙だよ、きみ。我々デジタルモンスターが死んだらどうなるか、きみも知っているだろう」

「粒子になって空に昇る。海底に降ることはない、か」

「高容量の完全体や究極体のデータであればその重さから沈降することはあるだろうが、雪のように見えるほどの数、そのランクのモンスターが死ぬことなど……」

ネモはぶつぶつとつぶやき、あれこれとデータを取っていた。

だけど基地に戻ったぼくたちはすぐに、それだけの大容量の死体が生まれた理由を知ることになった。帝国の輸送船が、海上でディープセイバーズからの襲撃を受けたのだ。

正確な日時は軍の方に記録されているはずだ。あの事件がきっかけで始まった戦争は、今もまだ終わっていないわけだから。



ディープセイバーズのヴァイクモン一派による襲撃はかなり入念に計画されたもので、この基地は完全に補給線を絶たれ孤立させられてしまった。

ぼくもネモも、基地から自由に出ることはできなくなった。外に出ればすべてが敵地なのだから当然の措置で、ぼくたちもあえて逆らおうとは思わなかった。

ネモの潜水艇計画もひとまず取りやめになった。帝国から援軍が基地に到達するまでこの離れ小島のような基地で持ちこたえなければいけなくなり、基地内の物資は廃材を含め

厳重に統制されるようになった。これではこっそり潜水艦など作れるわけもない。

それでもネモはそこまで気落ちしているようには見えなかった。戦いに際して山のよう
に増えた仕事の合間で、彼は今度はあのラジオが電波を拾うことのできる範囲を広げよう
と画策していた。ぼくも時々彼の話し相手としてラボに呼ばれ、おかげで他の人間たちよ
りも休息をとることができていた。

「基地内の噂を聞いたかい？ ネモ。君の繋いだ秘密回線で帝国本土と連絡が取れたらし
い。今日援軍が来る。ディープセイバーズが基地の通信を完全に遮断していると思ってい
る間に外と基地両面からの攻撃を行って、包囲網を突破、この基地への補給路を確保する
算段らしい」

ぼくのそんな言葉にも彼は濁った瞳を向けるばかりだった。

「ああ、そんなものもつくったような気がするね。だが、どうだろうと外に出られないの
では同じだ。彼女の歌をもう何か月聞いてない？」

「2週間だよ。ネモ」

「まだそれしか経っていないのか。実に空虚な気分させられるね。だが、それも今日ま
でだ」

そう言って彼はその長いアームを伸ばし、例のラジオをぼくに見せた。

「調整、終わったのかい？」

「ああ、おそらくはね」

そう言って彼が、いつものあの注意深い指先のしぐさでダイヤルを回せば、懐かしいノ
イズが部屋に響き渡る。

〈ここはくらい いつもどおり ここはつめたい いつもどおり〉

「少し雑音が多いな。そこは調整が必要だが、とにかく成功だ。聞こえたぞ」

ネモが歓喜の声をあげた。あの美しい歌は、ごちゃごちゃと散らかったラボで聞いても
美しいものだった。

〈きょうはゆきがふってる なんだかゆきばっかり〉

「ふむ、やはり雪とは戦死したモンスターたちの粒子らしいな」

〈あら みんながとおっていく うみのみんな〉

「珍しいね」

「ふむ、記録しておこう。彼女の描写からデジモンの種別を特定し、その生息域を調べる

ぼくが大声で止めてももう遅く、ネモはラボを飛び出していた。

電子音交じりの何を言っているのか分からない叫びをあげながら、彼は基地の外に飛び出し、駐車していたフロゾモンにとびついた。周囲から静止するような怒号が上がる。

警告の言葉、発砲音、周囲のデジモンたちに取り押さえられ見えなくなるネモの姿。そんなすべてがぼくには遠くの世界のことに思えた。

ふと、ぼくの手の中のラジオが震えて、ぼくは自分が咄嗟にそれをひつつかんで来たことに気付いた。

〈ああ　こんなわたしもいつか――〉

それが、彼女が届けた、最後の歌だ。



それからはあつけないものだった。ぼくは上官に呼び出され、ネモの行動に関して詰問された。知らぬ存ぜぬを通したぼくにあきれ顔のハイアンドロモンが聞かせてくれたところによれば、ネモは謹慎処分で済んだらしい。なににせよ、奇襲作戦でデーパーセイバーズに大きな損害を与えることができたのは彼の作った装備のおかげなのだから、とハイアンドロモンはいった

それから自分彼には会えないまま、1週間がたったころの、深夜のことだった。

返しそびれたあのラジオが残酷なノイズを垂れ流し続けるのを部屋で聞いていたぼくの通信機器に、ネモから連絡が入った。

「いつもの場所に来てくれ」

警備のギロモンの目をかいくぐり、いつものフロゾモンに乗り込むことで、簡潔で理不尽なそのオーダーを、ぼくはなんとかしてこなすことができた。

満月の夜だった。透明な空気を通した月の明かりを真白の大地が跳ね返し、あたりは昼よりも明るいように思えた。

夜にはこの地域の寒さは殺人的なものになる。フロゾモンの排熱部にびたりとくっついて、ぼくは歯をがちがちといわせて震えていた。

でも、ネモに指定された地点――いつもの海岸までついて、そこにあったモノを見て、ぼくの震えはおさまってしまった。

それは遠目には巨大な魚のようにしか見えなかった。けれど、すぐに頭上の月がその全

身を照らし出す。

一角獣の角。古代魚の顔。海竜の胴体。海豚の鰭。半魚人と甲殻類が半分ずつの腕。吹き抜ける冷たい夜風が、つぎはぎの化け物としか言いようがないそれが纏う生臭い屍臭をぼくのもとに運んできて、ぼくは思わずその場で嘔吐した。

「すまないね、こんなところまで来てもらって」

酸っぱい味の残る口を拭い、ぼくは微動だにしないその化け物の前に立っている友人に声をかける。

「ネモ、あなたはなにを……」

「コネを使つてね」

あくまで静かに、穏やかにネモは言う。

「帝国軍がああ戦闘でデリートしたデジモンたちの残存データを見せてもらったんだよ。ちぎれた体のパーツたち、裂け目からは徐々に粒子が漏れ出ていたっけ。ルカモンにイツカクモン、シードラモン、グソクモン、エビドラモン……」

彼はぶつぶつと種族名を列挙し、最後に澄み切った眼でぼくを見た。

「……どれが彼女なのか、私には分からなかった」

「当然だよ」

「そうはおもいたくなかった。だからこうしたんだ」

「目当ての宝石を見つけれないからって、そこらの石を全部つなげたのかい。それじゃあまるで……」

「無意味で狂っている、わかる」

彼の言葉には一切のよどみがなかった。

「でも、こうしないといけなかったんだ。こうするしかないよ、そうおもったんだ」

「……」

「でもまだだ。まだ彼女は歌わない」

「これは彼女じゃないだろう」

「でも、彼女を含んだものだ。私もそうだろうと思う」

そこで気づいた。ネモの背後の怪物が、その甲殻類の腕を彼の小さな体に伸ばしている。ぼくが声をあげても、全てを承知しているかのように彼は微笑むばかりだ。

甲殻類の腕で彼を挟むと同時に、怪物はもう一方の半魚のたくましい腕を、自身の胴、一角獣と海竜の継ぎ目に突っ込む。みちみちと嫌な音がして、無理やりに広げられた肉と肉の裂け目に、ネモが運ばれていく。

「やめるんだ！」

「あのラジオはきみが持つていてくれ。友人との別れに大したものを残せなくてすまない」
きわめて穏やかに、そんな言葉を残して、ネモの小さな体は肉に飲み込まれた。やがて目の前の怪物の死んだような目に光が宿り、やがてその合成獣——マリンキメラモンは生

き生きとした動きで、尾びれを翻して海へと戻っていった。
とぶん、そんな水音だけが、ぼくの耳に残っていた。

と、まあ、これがことの顛末だ。

それから少しして、氷床基地の全ての音響設備が1日に1回、歌にも似た奇妙なノイズを受信するようになった。実害はないが毎日きっかり同じ時間に歌を届けるその通信は、基地内の漂流者を中心に「ステイション・ノーチラス」と呼ばれるようになった。

その現象が1年近く続き、兵士たちの士気への影響も無視できなくなって、きみ達帝国は調査を始めた。そして、ノーチラスの歌が観測され始めた時期がナノモン個体ネモの失踪時期と重なることに気づき、参考人としてぼくを呼びつけたというわけだ。

……待って、その武器をしまいなよ。ぼくがいくつもの違反行為を告白したのは確かだけれど、裁判の形をとると決めたのはきみ達だけ。ぼくが証人にせよ、被告にせよ、法廷内で殺されるなんてことがあっちゃいけない。そうだろう？

それに、この話にはもう少しだけ続きがあるんだ。

1月前、ぼくが帝国首都への出頭を命じられ、身支度をしていた晩のことだった。ちょうどネモと最後にあつた時と同じように月明りの眩しい夜で、窓の外には濃い霧が立ち込めていた。そんなのはあの基地ですごして初めたことだったよ。

手荷物の整理を終えたぼくが最後にラジオ——さっきの話で何度も話していたラジオだよ。ネモがぼくにくれたって言っただろう？——に手を伸ばしたときにそれは起こった。

電源もついていないラジオのスピーカーが急に震えて、そして、懐かしい声を流し始めたのさ。

●
親愛なるきみへ。

まず、あんなかたちで別れることになってしまったってすまなかつた。

あの夜、あの場所で、きみが私を止めてくれたことを、友人としてなにより嬉しく思う。

きみの言い分は完全に正しかった。私は確かに狂っていた。

賢く勇氣ある友は、今でも何より私の誇りだ。だから、私は全てをきみに委ねることにした。これから私が話すことを信じようが、狂人のたわごとと思おうが、それを受けて何をしようが、きみの賢明さと勇敢さが一つも揺らぐことはない。

結論から言おう。私は彼女に会うことができた。マリンキメラモンとして意識を溶け合

わせることではじめて、お互いに存在を認識して話すことができた。

あの死体の中にいたグソクモン、それが彼女だった。いつも1人で深海をゆっくりと回遊しては、その日のことをことばにして、歌っていたそうだ。

何故歌うのかと聞いたら、彼女は「ただわすれてしまうよりずっといいから」と、そう答えていたよ。まったく、素晴らしいとおもわないかね？

私とその歌を聞いていたといったら、彼女はひどく驚いていたよ。恥ずかしがってもしいたようだったが、私はもう自分の中の親愛と恋慕の情を伝えることに一切の躊躇がなかった。

聞いてくれよ、友人。彼女は私を受け入れてくれた。そして、多分それがきっかけだったんだろう。進化の光が我々を包んだのは。

我々はいま、1頭の美しい首長竜だ。

かつてのように海底深くに忍び続けることこそできないが、深い霧が我々を守ってくれ。我々はとても美しく歌う。我々の歌は、人々をひどく物悲しい気持ちにさせる。

我々は時折深海へと潜る。戦火の明かりは太陽よりもまっすぐ海の底まで届き、今日もあの場所には雪が降っている。

さて、時に友人。君に頼みがあるんだが――。

あら かれのおともだち？

ふふ ねえ きいて

わたし いま こいをしているの

その首長竜に至る進化の系統樹に本来混ざるはずのないマシン型デジモンが混ざったせいか、その歌は周辺の機器に影響を与える。「ステイション・ノーチラス」の正体は1頭の首長竜――プレシオモンだった、というわけだ。

そしてその通信と一緒に、ネモはぼくにある特定の周波数を教えてくれた。

話によれば、1月後――つまりは今日、彼は、彼の中にいる皆と共に、その周波数に乗せて歌うらしい。とびきり大きな声で、とびきり美しく。歌い終わったら消えてしまうかもしれないが、それでもいいと彼らは言う。

その声は帝国が行っている戦いの戦地全域に届く。そしてこの首都にもね。

1年も「ノーチラス」のうわさを放っておいたのがきみたちの戦略的失敗だ。そして、節のついたただの音の連なりが、戦地でどれだけ皆の心を救うかを理解しなかったのが、きみたちの致命的失敗だ。

ぼくの言葉に、多くのものが賛同してくれた。人間も、デジタルモンスターも。彼らはこの1月で国中に散らばって、主要な機器がその周波数を受信するようにしてくれた。だからもうすぐ――。

おっと、法廷で武器を出すのはダメだといっただろ。ぼくの方だって穏やかならざる方法で逃げなくちゃいけないんだ……こうやってね。

紹介しよう。今壁をぶち破ってぼくを助けてくれたのが、ぼくたちの理解者にして古い友人のプロゾモン。ぼくは彼のことを「アーサー」と呼んでいる。

● さあ、みんな聞こえるかな。こちら「ステイション・ノーチラス」！今日はきみ達にとびきりの1曲をお届けしよう。

これは決して明るい歌じゃない。悲しく憂いに満ちた、でもそれでも恋の歌だ。

この曲は何かを変えるためにあるんじゃない。きつと明日も戦いは続くんだろう。

でも、これだけは言うておくよ。これからきみ達が流す涙は、きみ達の心の奥底が流した、ほんものだ。

ねえ、それだけわすれななくてくれよ。

タイトルは「ソロウブルー」だ。ノーチラスから、愛を込めて。

● ソロウブルー…プレシオモンの必殺技、透き通るような声で鳴き、聞くものの戦意を喪失させる。

● これは革命じゃない。テロでもない。明日も世界は変わらない。

でも、今夜は、今夜だけは。

ステイション・ノーチラスに雪は降らない。